

【フォーラム】

アカン語アサンテ方言の名詞の声調

古 閑 恭 子

高知大学

【要旨】 本稿は、アカン語アサンテ方言の名詞孤立形および所有名詞句の声調に関して筆者の調査データを提示し、分析を試みる。まず名詞孤立形の声調に関しては、①接辞が独自の声調を持つこと、②語根の声調は音節数に関わらず5つのタイプに分類されること、③声調の配分は音節単位になされていることを示す。次に所有名詞句については、Dolphyne (1986, 1988) に倣って名詞を2つのクラスに分類するが、Class I と Class II の根本的な違いが、所有名詞句において名詞の接頭辞の声調が現れるかどうかによってもたらされることを主張する。また、Class I の所有名詞句には通時的な声調変化が関与していることが知られているが (Stewart 1983, Dolphyne 1986)、この声調変化は、Stewart の言うような声調が変わる位置の移動ではなく、Dolphyne の言うように、浮き H 声調の語根頭への移動である。しかも、この浮き H 声調は語彙レベルで Class I 名詞が有するものではなく、もともと所有接語が持っていたものである*。

キーワード：アカン語、アサンテ方言、名詞、声調

1. はじめに

アカン語 (Akan) は、主に西アフリカのガーナ共和国で話され、話者人口 830 万人 (2004 年) を抱える、ニジェール・コンゴ語族 (Niger-Congo) クワ語派 (Kwa) の言語である。アサンテ方言 (Asante)、ファンテ方言 (Fante)、アクアペム方言 (Akuapem)、アゴナ方言 (Agona)、ダンチラ方言 (Dankyira)、アセン方言 (Asen)、アチェム・ボソメ方言 (Akyem Bosome)、クワウ方言 (Kwawu)、アハフォ方言 (Ahafo) の 9 方言に下位分類される (Gordon ed. 2005)。本稿が対象とするのは、このうちアサンテ方言であり¹、データは全てインフォーマント調査によって得た一次資料

* 本稿は、2007 年 3 月に東京外国語大学大学院地域文化研究科に提出した博士学位論文「アカン語アシャンティ方言の研究—特に音韻を中心として—」第 4 章「アカン語の声調」の一部であり、日本言語学会第 135 回大会およびアフリカ言語研究会で発表した内容に加筆修正したものである。発表に際して、多くの方々に貴重なコメントをいただいた。また本稿の査読の先生方には、詳細にわたってご批判、コメントをいただいた。ここで感謝申し上げます。ただ、筆者の力不足のため、いただいたコメントのうち本稿に反映できなかった部分も多く、これらは今後につなげたい。本稿で使用したデータはすべて、日本で大学院に通うサミュエル・アンボンサーさん (Samuel Amponsah) の協力により収集したものである。また、本稿で使用したデータは、笹川科学研究助成 (財団法人日本科学協会) によって行った調査で得たものである。

¹ 方言名の「アサンテ」と州の名称の「アシャンティ」は同じものであるが、本稿では方言名はアカン語の発音に近い「アサンテ方言」とし、州の名称としては一般的に用いられる「アシャンティ州」とした。

である²。

アカン語は、声調言語である。声調素は、H (High: 高平板) と L (Low: 低平板) の2種類である。表層ではHの後ろにのみ現れるやや低いHがあるが、1音節にLHが実現したため起こったダウンステップによるものである。これは、ダウンステップHがもともとLHであったことを示唆する語が認められることや³、派生によって浮きL声調が生じる場合に後続のH音節がダウンステップHで実現すること(3.3節参照)に示される。本稿では、Lは^ˋで、Hは^ˊで、ダウンステップHは^{ˊˋ}で表記する。

本稿で用いる表記とそれに対応する概略的音価は、以下の通りである(子音は正書法に準ずるが、母音は音韻体系が反映されていないのでIPAを用いる)。

子音: p [p], b [b], t [t], d [d], ky [c], gy [j], k [k], g [g], f [f], s [s], hy [ç], h [h], r [ɹ], l [l], m [m], n (音節頭では [n], 音節末では直前の母音が a または e の時は [ŋ], それ以外の時は [ŋ]), ny [ɲ], w (i, ɪ の前では [ɥ], それ以外の環境では [w]), y [j], tw [cʷ], dw [ɟʷ], hw [çʷ], kw [kʷ], nw [ɲʷ].

母音: i [i], ɪ [ɪ], ɪ [ɪ], ĩ [ĩ], e (鼻子音の前後では [ẽ], それ以外の環境では [e]), ɛ (鼻子音の前後では [ẽ], それ以外の環境では [ɛ]), a (i, u の前では [ɶ], それ以外の環境では [a]), ǣ (i, u の前では [ɶ], それ以外の環境では [ǣ]), ɔ (鼻子音の前後では [ɔ̃], それ以外の環境では [ɔ]), o (鼻子音の前後では [õ], それ以外の環境では [o]), u [u], ũ [ũ], u [u], ũ [ũ].

音節構造は次の5通りである(・は音節境界を表す)。

V (ɔ̃.kó 'he goes'), CV (kó 'to go'), N (n.sá 'hand'), VN (án.ká 'orange'), CVN (núm 'to drink').

なお、本稿のテーマには直接関係しないが、アカン語は母音調和が顕著である。咽頭腔拡張素性 [Expanded] に基づき、a 以外の8母音が [+Expanded] グループ i, e, u, o と [-Expanded] グループ ɪ, ɛ, ʊ, ɔ に分類され、母音調和の領域(基本的に1語根と接辞からなる語)において、どちらか一方のグループの母音しか現れない(母音が鼻音であるかどうかは調和に関与しない)。

2. 名詞孤立形の声調

アカン語の名詞の声調については、これまで Christaller (1964: 30–32) と

² インフォーマントのアンボンサーさんは、ガーナ共和国アシャンティ州出身の30歳代の男性で、生後1998年までアシャンティ州に居住し、1998年以降日本に滞在している。本稿で使用了名詞のデータは、計566語である。

³ 筆者のデータによる á-!kó 'parrot' は、Christaller (1933) によると á-koó であり、筆者データとの違いは通時的変化によるものと推測される。

Dolphyne (1988: 76–78) に、どのようなパターンがあるかについて若干言及があるのみである。筆者のこれまでの分析結果、名詞語根は、後に扱う所有名詞句を除き、基本的に同じ表層声調形で現れる⁴。ここでは、孤立形における表層声調形を提示する。孤立形の構造は (1) のようになる (- は接辞境界を表す)。

(1) (接頭辞) - 語根 - (接尾辞)

接頭辞には、単数接頭辞 ε -/ e -, γ -/ o -, a -, an - と複数接頭辞 N - がある⁵。 ε -/ e -, γ -/ o - は、それぞれ母音調和に従って相補分布する異形態であり、 N - は語根頭子音の同調音点鼻子音である。接尾辞には、名詞接尾辞と指小辞がある。名詞接尾辞は、語根末母音が高母音である名詞のほとんどの、孤立形で現れる (語根末母音が高母音でない場合、名詞接尾辞は付かない)。語根末高母音が口母音である場合、それより一段低い母音が付く。つまり、語根末母音が i / i の場合 $-e$ / $-e$ が、 u / u の場合 $-o$ / $-o$ が付く (これらの分布も母音調和による)。語根末高母音が鼻母音の場合、名詞接尾辞は語根末母音のコピーとして実現する。指小辞 $-wa$ / $-a$ (どちらが付くかは語によって決まっている) は、名詞 ε -bá ‘child’ に起源を持ち (Christaller 1964: 23), ごく一部の名詞にのみ現れ、当該事物が小さいこと、若いこと、あるいは女性であることを表す。

2.1. 接辞の声調

接頭辞は、(2) のように基本的に L で現れる⁶。

⁴ 例えば以下のように、語、語根、接語が隣接する環境において、基本的に語根の声調は変化しない (3.2 節で述べるように、語根頭のダウンステップは、接頭辞同化によりもともと接頭辞が持っていた L が語根頭に実現することによって起こったものである)。

語境界	$\dot{n}$ - $\dot{s}u$ - $\acute{o}$	‘water’
	$\dot{n}$ - $\dot{s}u$ - $\acute{o}$ $t\grave{o}$	‘It rains.’
	water rain	
接語境界	$\acute{o}$ = $\dot{d}wa\dot{r}i$	$\dot{n}$ -/ $\dot{s}u$ - $\acute{o}$ = $\acute{m}u$ ‘He swims.’
	3 人称単数主語接語 =swim water=in	
	$\dot{n}$ - $\dot{s}u$ - $\acute{o}$ = $\acute{n}u$	‘the water’
複合語	water=the	
	$\acute{a}$ - $\dot{n}i$ - $\dot{s}u$ - $\acute{o}$	‘tear’
	eye-water	

⁵ Christaller (1964: 21–22) は、接頭辞はある程度クラスを示すと述べるが、筆者のデータにはクラスの存在は示唆されず、概して ε -, γ -, a -, an - は単数を、 N - はほぼ複数を表すということ位しか言えない。あるいは、かつて接頭辞はクラスを示していたが、そのような区別が通時的にはほぼ失われ、接頭辞は単数/複数の区別しか表さなくなったとも考えられる。

⁶ 筆者のデータ中 (名詞 566 語、うち接頭辞を取るもの 341 語)、接頭辞が H で現れる語が、以下の 7 語見つかっている。これらにおいてなぜ接頭辞が H で現れるのかについては、現在検討中であり (語根頭の H が接頭辞に移動した可能性がある)、本稿では特に取り上げなかった。

$\acute{a}$ - $\dot{n}ansi$	‘spider’	$\acute{a}$ - $\dot{t}ur\dot{u}hw\grave{i}$ - $\acute{e}$	‘sparrow’
$\acute{a}$ - $\dot{m}a$	‘personal name’	$\acute{a}$ - $\dot{l}ko$	‘parrot’
$\acute{a}$ - $\dot{m}ani$	‘sardine’	$\acute{a}$ - $\dot{n}ani$	‘personal name’
$\acute{e}$ - $\dot{n}u$	‘mother’		

- | | | | | |
|-----|----------|--------|----------|----------|
| (2) | è-nám | ‘meat’ | è-mó!gyá | ‘blood’ |
| | ò-bèr!ma | ‘male’ | ò-sísiré | ‘bear’ |
| | à-basá | ‘arm’ | àn-kaá | ‘orange’ |
| | m-pòmpó | ‘boil’ | n-gúma | ‘fur’ |

接尾辞は, (3), (4) のように基本的に H で現れる⁷。

- | | | | | |
|-----|-----------|----------------|-----------|-------------|
| (3) | è-tú-ó | ‘buttock’ | à-pú!pú-ó | ‘shellfish’ |
| | wídí-é | ‘skin’ | nántwí-é | ‘cow’ |
| | è-fí-í | ‘filth’ | kyénsí-í | ‘pan’ |
| (4) | túà-wá | ‘small bottle’ | à-ní-wá | ‘eye’ |
| | à-bírí-wá | ‘old woman’ | è-kà-á | ‘ring’ |
| | à-nùma-á | ‘bird’ | ò-bá-á | ‘female’ |

2.2. 語根の声調

語根は, 音節数あるいは接辞の有無に関わらず, 表1のように, ①全体がLで現れるパターン, ②全体がHで現れるパターン, ③語根末にのみHが現れるパターン, ④語根頭にのみHが現れるパターン, ⑤語根末にダウンステップHが現れるパターンに分類できる⁸。ここでは順に, ①Lタイプ, ②Hタイプ, ③LHタイプ, ④HLタイプ, ⑤H!Hタイプと呼んでおく(網かけは, データがないことを表す。3音節語根までしか挙げていないのは, 4音節語根はほとんどなく, 5音節以上の語根は全くないためである)。

2.3. 分析

データの分析から言えることは, 以下の通りである。語根の声調は, 接辞の有無とは関係なくパターン化されるため, 接辞は語根によらず, 独自の声調を持つと考えられる。語根の声調は, 音節数に関わらず5つのタイプに分類される。

語根の声調に関する問題の1つは, 何が声調の単位をなすかである。このことは, (5)の例に示すことができる。(5)で, CVNは声調に関してCVと同じ機能を果

⁷ Lで現れるのは次の1語のみなので, 本稿ではこれを例外とする。

a-tùrúhwí-é ‘sparrow’

⁸ この5パターンに当てはまらないものとして, 以下の4パターンが見つかるが, いずれも1, 2語しか見つからない, あるいは外来語に限られるため, 本稿では対象外とした。

(L)LHL	pòduá	‘tail’	
	sùkúú	‘school’	< Eng.
	sigarí!t	‘cigarette’	< Eng.
HLH	paápá	‘father’	
	máami	‘mother’	
HH!H	kití!kí	‘train’	
HHL(L)	fáránkà-á	‘flag’	
	tíibíi	‘TV’	< Eng.

表1 名詞孤立形の表層声調形

音節数	声調タイプ		L タイプ	H タイプ	LH タイプ	HL タイプ	HH タイプ
1 音節語根	ε-pù	'sea'	ε-tí ε-nam	'head' 'meat'			
2 音節語根	kwàdwù	'Kwadwo'	bóɔ́	'sack'	mùma'	gyáa	dwún'só
	bànkɔ̀yì	'cassava'	kúɔ́	'one'	dòmpe'	sòfí	sí'kan
	wòfá	'uncle'	kúku-ó	'pot'	bònkum	kyénsí-í	pí'á
	a-sawu	'fish net'	n-gúma	'fur'	a-kúma'	a-tabù	e-mó'gya
	a-bèbèn	'horn'	ε-hwíni	'nose'	a-taban	e-wúra	a-dwé'í
	a-núma-a	'bird'	a-dwíni	'mind'	a-wia	a-mangò	ɔ́-dén'kyem
3 音節語根	bàbasù	'disease'	piéto	'shorts'	màami	wansana	bùsú'mí
	a-petehyì	'liquor'	ε-niema	'baggage'	kòtòdwe	paanù-ú	píra'ko
	a-sèkyere	'Askkyere'	n-húhúá	'ant'	a-pintúá	a-barana-a	ɔ́-bèrí'ma

たしていることが分かる（左の列は N を CV と同じく 1 単位と見なした場合、右の列は CVN を 1 単位と見なした場合）。また、孤立形において、CVN が LH あるいは HL で現れることは皆無である（*à-tàbàn, *à-tàbàn. ただし、3.3 節で述べるように、派生によって CVN が HL で現れることはある）。したがって、アカン語の声調はモーラ単位でなく音節単位に配分されているといえる。

(5)	タイプ	モーラ単位	音節単位			
	LH	(à-)tábán	(à-)tábán	‘wing’	cf. (à-)kù má	‘heart’
		(L-)LHH	(L-)LH		(L-)LH	
	HL	kyénǝ̀(ǝ̀)	kyénǝ̀(ǝ̀)	‘pan’	cf. soǝ̀	‘shovel’
		HHL(-H)	HL(-H)		HL	
	H!H	(ǝ̀)ǝ̀dén!kyém	(ǝ̀)ǝ̀dén!kyém	‘crocodile’	cf. (ǝ̀)moǝ̀!gyá	‘blood’
		(L-)HH!HH	(L-)H!H		(L-)H!H	

以上より、声調タイプ、語根音節数別の名詞孤立形の声調パターンは、表 2 のように表される(σは音節を表す。4 音節語根は、実際にはほとんど見つかっていない)。

表 2 名詞孤立形の声調パターン

タイプ	1 音節語根	2 音節語根	3 音節語根	4 音節語根
L	(ǝ̀-)ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)
H	(ǝ̀-)ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)
LH	——	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)
HL	——	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)
H!H	——	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)	(ǝ̀-)ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀ǝ̀(-ǝ̀)

3. 所有名詞句における声調

本節では、所有名詞句における声調を扱う。前節に述べたように、名詞語根の声調は 5 タイプに分類される。これらの語根の声調は基本的に常に変わらないが、所有名詞句において異なる表層声調形で現れることがある。

声調タイプに関わらず、所有名詞句における名詞語根の声調の振舞いには 2 通りある。一方は、孤立形やその他の環境における声調と同様であるが、もう一方は、孤立形およびその他の環境とは異なる表層声調形を示す。

Dolphyne (1986, 1988) は、所有名詞句におけるこういった名詞語根の声調の振舞いの違いから、名詞を 2 つのクラスに分類する。この 2 通りの声調の振舞いは、筆者のデータにも同様に認められる。本稿では Dolphyne に倣い、それぞれ Class I, Class II と呼ぶ⁹。Dolphyne の説を踏まえると、基底声調形が同じであるのに所有名

⁹ Dolphyne は触れていないが、筆者のデータ分析から明らかになったことは、まず Class I は Class II に比べて圧倒的に多いことである（普通名詞 544 語中 444 語）。このことは、Class I

- (9) a. ̀n-sá ‘hand’ b. ̀a-nú ‘mouth’
 ̀nɪ=̀n-sá ‘his hand’ ̀nà-nú ‘his mouth’
 ̀kofí n-sá ‘Kofi’s hand’ ̀kofí á-nú ‘Kofi’s mouth’

表3に、所有名詞句の表層声調形を、声調タイプ、クラス別に示す（網かけはデータがないことを表す）¹¹。なお、本稿では、所有接語は3人称単数 nɪ=/ni= で（i, uの前では ni=, それ以外の環境では nɪ=）、所有者名詞は kofí ‘Kofi’ で代表させる¹²。

表3 所有名詞句の表層声調形

タイプ	Class I	Class II
L	sirè ‘thigh’	wɔ́fá ‘uncle’
	nɪ=sirè ‘his thigh’	nɪ=wɔ́fá ‘his uncle’
	kofí sirè ‘Kofi’s thigh’	kofí wɔ́fá ‘Kofi’s uncle’
	bábàsù ‘venereal disease’	ɛ̀-pù ‘sea’
	nɪ=bábàsù ‘his disease’	nɪ=pù ‘his sea’
	kofí bábàsù ‘Kofi’s disease’	kofí pù ‘Kofi’s sea’
	à-pètèhyì ‘kind of liquor’	
	nà-pètèhyì ‘his liquor’	
	kofí á-pètèhyì ‘Kofi’s liquor’	
H	̀n-sá ‘hand’	̀n-sǎ ‘drink’
	nɪ=̀n-sá ‘his hand’	nɪ=̀n-!sǎ ‘his drink’
	kofí n-sá ‘Kofi’s hand’	kofí n-!sǎ ‘Kofi’s drink’
	è-tí ‘head’	è-ná ‘mother’
	nɪ=tí ‘his head’	nɪ=!ná ‘his mother’
	kofí tí ‘Kofi’s head’	kofí !ná ‘Kofi’s mother’
	̀a-nú ‘mouth’	è-fí-í ‘filth’
	nà-nú ‘his mouth’	nɪ=!fí-í ‘his filth’
	kofí á-nú ‘Kofi’s mouth’	kofí !fí-í ‘Kofi’s filth’
	bótó ‘sack’	è-nám ‘meat’
	nɪ=bótó ‘his sack’	nɪ=!nám ‘his meat’

¹¹ ただし、以下のように、どちらのクラスとしても分析不可能なものが3語見つかっている。

à-básá ‘arm’ à-pántàn ‘jaw’ tèkìrèma ‘tongue’
 nà-básá ‘his arm’ nà-pántàn ‘his jaw’ nɪ=tèkìrèma ‘his tongue’
 kofí á-básá ‘Kofi’s arm’ kofí á-pántàn ‘Kofi’s jaw’ kofí tèkìrèma ‘Kofi’s tongue’

¹² 所有接語は以下の6種類であるが、声調は全て同じである。また、所有者名詞の声調は後部要素の声調に影響を及ぼさない。

mùma ‘forehead’	wù=mù!má ‘your（単数）forehead’
mɪ=mù!má ‘my forehead’	2 人称単数所有接語 =forehead
1 人称単数所有接語 =forehead	yè=mù!má ‘our forehead’
nɪ=mù!má ‘his forehead’	1 人称複数所有接語 =forehead
3 人称単数所有接語 =forehead	òn=mù!má ‘their forehead’
mù=mù!má ‘your（複数）forehead’	3 人称複数所有接語 =forehead
2 人称複数所有接語 =forehead	kofí mù!má ‘Kofi’s forehead’
kofí mù!má ‘Kofi’s forehead’	kwámì mù!má ‘Kwame’s forehead’
Kofi forehead	Kwame forehead

	kòfì bótó	‘Kofi’s sack’	kòfì !nám	‘Kofi’s meat’
	n̄-gúma	‘fur’	ò-núa	‘brother/ sister’
	n̄=n̄-gúma	‘his fur’	n̄=!núa	‘his brother’
	kòfì n̄-gúma	‘Kofi’s fur’	kòfì !núa	‘Kofi’s brother’
LH	síká	‘money’	pápá	‘father’
	n̄=sí!ká	‘his money’	n̄=pápá	‘his father’
	kòfì sí!ká	‘Kofi’s money’	kòfì pápá	‘Kofi’s father’
	dòmpe	‘bone’	síwa-a	‘aunt’
	n̄=dòmpe	‘his bone’	n̄=síwa-a	‘his aunt’
	kòfì dòmpe	‘Kofi’s bone’	kòfì síwa-a	‘Kofi’s aunt’
	á-tabán	‘wing’	maámí	‘elderly woman’
	nà-tá!bàn	‘his wing’	n̄=maámí	‘my mother’
	kòfì á-tá!bàn	‘Kofi’s wing’	kòfì maámí	‘Kofi’s mother’
	n̄-túma	‘cloth’		
	n̄=n̄-tú!ma	‘his cloth’		
	kòfì n̄-tú!ma	‘Kofi’s cloth’		
	ò-pónkó	‘horse’		
	n̄=pónkó	‘his horse’		
	kòfì pónkó	‘Kofi’s horse’		
HL	è-wúra	‘weed’	ò-wúra ¹³	‘master’
	n̄=wúra	‘his weed’	n̄=wúra	‘his master’
	kòfì wúra	‘Kofi’s weed’	kòfì wúra	‘Kofi’s master’
	sófi	‘shovel’		
	n̄=sófi	‘his shovel’		
	kòfì sófi	‘Kofi’s shovel’		
	á-tabù	‘wing’		
H!H	nà-tabù	‘his wing’		
	kòfì á-tabù	‘Kofi’s wing’		
	sí!kán	‘cutlass’		
	n̄=sí!kán	‘his cutlass’		
	kòfì sí!kán	‘Kofi’s cutlass’		
	è-mó!gyá	‘blood’		
	n̄=mó!gyá	‘his blood’		
	kòfì mó!gyá	‘Kofi’s blood’		
	búsú!mí ¹⁴	‘moon’		
	n̄=búsù!mì	‘his moon’		
	kòfì búsù!mì	‘Kofi’s moon’		

¹³ 語内では一般的にダウンステップ H の後ろに L は許容されず、L が後続する場合、ダウンステップ H 以降が L で実現する (Dolphyne 1988: 64–65)。これは、声調規則 H!HL / H!H!H → HLL によって表わされ、これにより次のように導かれる。

n̄=!wúra → n̄=wúra kòfì !wúra → kòfì=wúra

¹⁴ 注 13 と同様に、声調規則 H!HL / H!H!H → HLL により、次のように導かれる。

n̄=bú!sú!mí → n̄=búsù!mì kòfì bú!sú!mí → kòfì búsù!mì

Class I と Class II の所有名詞句における声調の違いは、以下の3点である。第一に、(10a, c, e) に示すように Class I 所有名詞句で所有接語は常に L で現われるが、(10b, d, f) のように Class II の場合は常に H で実現する。第二に、(10a, c) に示すように Class I 名詞の語根頭は H になるが(もともと H の場合は(10e)のように変化しない)、(10b, d) のように Class II 名詞の語根の声調は変化しない。第三に、名詞が接頭辞を取りかつ語根頭が H の時、(10e) のように Class I 名詞の語根頭は H のままであるが、(10f) のように Class II 名詞の語根頭にはダウンステップが起こる。

Class I			Class II		
a.	sìrè	'thigh'	b.	wòfà	'uncle'
	nì=sìrè	'his thigh'		ní=wòfà	'his uncle'
	kòfì sìrè	'Kofi's thigh'		kòfì wòfà	'Kofi's uncle'
c.	sìkà	'money'	d.	pàpà	'father'
	nì=sì!kà	'his money'		ní=pàpà	'his father'
	kòfì sí!kà	'Kofi's money'		kòfì pàpà	'Kofi's father'
e.	n-sá	'hand'	f.	n-sá	'drink'
	nì=n-sá	'his hand'		ní=n-lsá	'his drink'
	kòfì n-sá	'Kofi's hand'		kòfì n-lsá	'Kofi's drink'

3.2. 先行研究

Stewart (1983) と Dolphyne (1986) は、アサンテ方言における所有名詞句の声調の振舞いに、通時的変化が関与すると指摘する。(11) に示すように、同じアカン語のファンテ方言においては、まず、クラスに関わらず所有接語は常に H である。また、ファンテ方言においては基本的に Class I も Class II も語根に変化はない。(11) ní=n-lsá 'his drink' で語根頭にダウンステップが起こっているのは、3.1 節に述べた接頭辞同化によって、もともと接頭辞が持っていた L が語根頭を実現したためであり、これは一般的に起こる現象である¹⁵。ファンテ方言における両クラスの唯一の違いは、(11f, l) のように、接頭辞を取りかつ語根頭が H の名詞にダウンステップが起こるか起こらないかである。

なお、アサンテ方言においても Class II 所有名詞句では所有接語が H で語根も変化しないので、アサンテ方言とファンテ方言の Class II 所有名詞句における声調

¹⁵ 形態素境界において、接頭辞がありかつ語根頭が H であれば、もともと接頭辞が持っていた L が語根頭を実現してダウンステップが起こる。

ǎ=tú	ǎ-!gyán	'He draws a bow.'
3 人称単数主語接語 =shoot bow		
ǎ-dwí-n-!gǒ		'palmkernel oil'
palmkernel-oil		
ǎ-bé-n-!kwán		'palm soup'
palm-soup		

は, (11g) ~ (11l) のように全く同じである。(11k) のように接頭辞を取りかつ語根頭が H の場合にダウンステップが起こる点も同じである。以下のファンテ方言のデータは, Stewart (1983: 235–236), Dolphyne (1986: 39, 41), Dolphyne (1988: 71–72) による。

(11)			Asante		Fante	
Class I	sìrè	‘thigh’	a. nì=sìrè	b. ní=sìrè	‘his thigh’	
	sìká	‘money’	c. nì=sí!ká	d. ní=sìká	‘his money’	
	n-sá	‘hand’	e. nì=n-sá	f. ní=n-sá	‘his hand’	
Class II	wòfà	‘uncle’	g. ní=wòfà	h. ní=wòfà	‘his uncle’	
	pàpá	‘father’	i. ní=pàpá	j. ní=pàpá	‘his father’	
	n-sá	‘drink’	k. ní=n-lsá	l. ní=n-lsá	‘his drink’	

Stewart (1983) は, (Class I における) アサンテ方言とファンテ方言のこのような声調の違いについて, ファンテ方言が通時的に古い声調形を留めており, アサンテ方言において右方向への声調移動 (tone shift) が起こったことによると提起する。Stewart は, 所有名詞句といくつかの動詞の活用形を挙げ (Stewart は名詞のクラスの存在には言及していない), アサンテ方言とファンテ方言のこのような声調の対応が, ある程度一般的なものであると主張する (しかし, 実際は Dolphyne (1986) が指摘するように, このような声調の対応が見られるのは, ごく限られた構造においてのみである)。Stewart (1983: 235) は, 声調移動を次のように定義する (下線は筆者による)。

語内で 2 つの連続する音節の声調が異なる時, 声調が変わる位置が, 第二音節の始まりから終わりに移動する。

この定義によって, (12) のような対応が説明される (Stewart 1983: 236) ¹⁶。この場合, H から L に声調が変わる位置が, 語根 kuma の第一音節 ku の始まりから終わりに移動した (言い換えると, H が 1 音節右に拡張した) ことになる (ファンテ方言では所有者名詞の後ろに必ず所有接語を伴う)。

(12)	Fante		Asante	
	kòfí	ná=a-kùma	kòfí	á-kúma ‘Kofi’s heart’
	Kofi	3 人称単数所有接語 =heart	Kofi	heart

問題は, (13) のような場合である。このようなアサンテ方言の例における語根頭の H を説明するために, Stewart (1983: 236) は, 語根頭直前に H 声調を担うゼ

¹⁶ 筆者のデータは, 次のように Stewart のデータと若干異なるが, いずれにしても Stewart の声調移動の定義に反しない。

à-kùma	‘heart’	kòfí á-kú!ma	‘Kofi’s heart’
--------	---------	--------------	----------------

ように説明できる。(15)の例において、浮き H 声調が語根頭音節に移動するとともに、語根頭音節がもともと持っていた L が右隣の音節に移動する。その結果、語根第二音節にダウンステップが起こる。

(15) Class I (Asante)

*kòfí 'síká → kòfí síkǎ → kòfí sí!ká
'Kofi's money'

しかし (15) に対して、(16) のように、同じ Class I の LH タイプ 2 音節語根で第一音節が CVN の場合には、語根は H!H ではなく HLH で現れる。

(16) Class I (Asante)

*kòfí 'dòmpe → kòfí=dòmpe cf. *kòfí=dóm!pé
'Kofi's bone'

(15) との比較から、明らかに (16) では語根頭音節が 2 モーラであるために下降調で実現したものと考えられる。これを踏まえると、なぜ (15) で H が語根頭に移動するとともに語根頭音節がもともと持っていた L が右隣の音節に移動したのかが理解できる。すなわち、CV 音節 (1 モーラ) は HL で実現され得ないため、L が右隣に移動したと考えられるのである。

第二に、Stewart も Dolphyne も、浮き H 声調は Class I 名詞が基底で持つとする。しかし、この H はもともと所有接語が担っていたもので、この所有接語の H がアサンテ方言において Class I 名詞の語根頭に実現したと考える方が妥当である。そう考えると、他の構造では現われることのないアドホックな浮き H 声調の設定も必要なくなり、Class II 所有名詞句でアサンテ方言もファンテ方言と同様に所有接語が H で現われ、語根の声調に変化がないことも説明がつく。

最後に、Class I と Class II の根本的な違いについて検討したい。Class I と Class II の違いは、声調移動だけによってもたらされるわけではない。3.2 節で述べたように、声調移動が起こっていないファンテ方言においても、(17) のように、接頭辞を取りかつ語根頭が H の名詞にはクラスの違いが現れる。

(17) Fante

Class I ñ-sǎ 'hand' ní=ñ-sǎ 'his hand'
Class II ñ-sǎ 'drink' ní=ñ!sǎ 'his drink'

Class II 所有名詞句の声調は、形態素境界で一般的に見られる声調である。3.2 節でも述べたが、本来は Class II 所有名詞句のように、接頭辞同化によってもともと接頭辞が持っていた L が語根頭に実現し、ダウンステップが起こる。したがって、Class I の声調が特殊であり、その特殊性は、接頭辞の L が語根頭に現れないことにあると言える。Class I と Class II の違いが、根本的には所有名詞句において接頭辞の声調が現れるか現れないかの違いであることを踏まえると、通時的声調変化と

所有名詞句におけるクラスの対立との関係について、次のように整理できる。もともとは、現在のファンテ方言のように、所有名詞句において接頭辞を取りかつ語根頭が H の名詞にのみクラスの対立が現れていたが、声調移動が Class I 所有名詞句にのみ起こったことにより、アサンテ方言において全ての Class I と Class II の対立が表層に現れた。

4. おわりに

本稿では、アカン語の名詞の声調に関して、孤立形および所有名詞句の声調に焦点を当て、考察した。まず、名詞孤立形の声調について以下のように考察した。第一に、接辞は独自の声調を持つ。第二に、語根の声調は音節数に関わらず 5 つのタイプに分類される。第三に、声調の単位は音節である。

次に、所有名詞句における名詞の声調の振舞いについて、以下のように考察した。Dolphyne (1986, 1988) が指摘するように、名詞は所有名詞句における声調の振舞いの違いから 2 つのクラスに分類される。さらに Stewart (1983) と Dolphyne (1986) が指摘するように、アサンテ方言において、Class I 所有名詞句は通時的な声調変化を経ている。本稿では両研究を踏まえた上で、以下のように議論した。まず、声調移動は Stewart の言う声調が変わる位置の移動ではなく、Dolphyne の言うように、浮き H 声調の語根頭への移動である。しかも、この浮き H 声調は語彙レベルで Class I 名詞が持つものではなく、もともと所有接語が持っていたものである。そして、Class I と Class II の根本的な違いは、所有名詞句において Class I 名詞の接頭辞の声調が現れないことによってもたらされる。

以上は、アカン語の名詞に関する、現時点で筆者ができる限りの分析である。名詞が基底でどのような声調情報を持つのか、所有名詞句の声調がどのように表層化するのかなどといった細かな分析は、今後の機会に譲りたい。また、本稿では言及しなかったが、なぜ Class I 所有名詞句にだけ声調移動が起こったのかという問題もある。Dolphyne (1986: 42–43) は、Class I 所有名詞句の特殊な声調によって、名詞間の関係について属格なのか同格なのかで区別されると指摘する。共時的には、ファンテ方言の Class I においては、接頭辞を取りかつ語根頭が H の場合にしかこの区別は現れないが、声調移動が起こったアサンテ方言においては、ファンテ方言よりもはるかに多くの Class I 名詞で属格／同格の区別がなされている。Class I におけるこのような区別の必要性が、声調移動をもたらしただけの原因ではないかと推測できる。

参 照 文 献

- Christaller, Johann Gottlieb (1933) *Dictionary of the Asante and Fante language called Tsbi (Twi)*. Basel: Basel Evangelical Society.
 Christaller, Johann Gottlieb (1964) *A grammar of the Asante and Fante language called Tsbi*. Basel: Basel Evangelical Society.
 Dolphyne, Florence Abena (1986) Tone and grammar in Akan: The tone of possessive constructions in

- the Asante dialect. In: Koen Bogers, Harry van der Hulst and Maarten Mous (eds.) *The phonological representation of suprasegmentals*, 35–49. Dordrecht: Foris Publications.
- Dolphyne, Florence Abena (1988) *The Akan (Twi-Fante) language: Its sound systems and tonal structure*. Accra: Ghana Universities Press.
- Gordon, Raymond (ed.) (2005) *Ethnologue: Languages of the world*. 15th edition. Dallas: SIL International.
- Stewart, John (1983) The Asante Twi tone shift. In: Ivan R. Dihoff (ed.) *Current approaches to African linguistics* 1, 235–243. Dordrecht: Foris Publications.

執筆者連絡先：

780-8520 高知県高知市曙町 2-5-1
高知大学
koga@kochi-u.ac.jp

[受領日 2008 年 1 月 31 日

最終原稿受理日 2008 年 11 月 10 日]

Abstract

Tone of Nouns in the Asante Dialect of Akan

KYOKO KOGA

Kochi University

Akan (Niger-Congo, Kwa) is a tone language spoken mainly in Ghana. This paper deals with the tonal behavior of Akan nouns. First, the tone of nouns in isolated forms is presented. It is pointed out that the affixes have their own tones, and that there are five tone types of the roots. Also, it is shown that the unit for tone distribution is a syllable, not a mora.

Second, the tone of possessive noun phrases is discussed. Dolphyne (1986, 1988) observes that there are two tonal patterns of noun roots in possessive noun phrases regardless of their tone types, and based on this difference, she classifies nouns into two classes. The situation in Asante dialect, however, is more complicated because Class I possessive noun phrases seem to have undergone a historical ‘tone shift’, as Stewart (1983) and Dolphyne (1986) have argued.

While Stewart (1983) defines the tone shift as deferment of the change in tone register, I present my analysis along the lines of Dolphyne (1986), who defines the tone shift as a shift of the floating H to the root initial syllable. Additionally, although both Stewart and Dolphyne explain that the floating H is lexically posited in front of the roots of Class I, I propose that the floating H should historically be attributed to the possessive clitic itself. Lastly, I emphasize that the critical difference in tones of possessive phrases between Class I and Class II is that in the former class, the tone of the prefix is not realized.